

令和5年度の主な事業報告

社会福祉法人 ふじの郷

●法人全体

①地域支援プロジェクト第2期事業の一時中断

法人として今年度は、地域支援プロジェクト第2期として男子棟の増改修工事に向けた造成工事の完工とその為の補助金申請等が活動の柱であったが、世界各地における紛争により輸入品目や諸物価の高騰は当初考えていた予算を大幅に上回る規模となり、日々の事業運営に差し障りが出ると判断し、一時中断するとの結論に至りました。

然し乍ら、さつき学園の建物は28年の歳月を経て、空調関係の故障が散見される事態が続いており、この機会に全面切り替えることにしました。同時に、照明器具のLED化を室内外共に実施して電気代の節約を図りました。

感染症対策としての個室化によるゾーン化は喫緊の課題でもあり、このプロジェクトの狙いとも一致しています。当初の計画を一部手直しして、早期に再申請をして参ります。

②新型コロナウイルス5類以降後の生活

感染症対策委員会で新たな対応方針を決定して、各事業所での単発的な感染があったが、職員、保護者の皆様方の多大なご協力の元、大きな広がりも無く各事業所とも予定していた行事を無事に終えることが出来ました。

③地元自治体と連携した、絆棟を利用した避難訓練と防災対策の強化

地元、御殿場市からの特段の要望が無い中ですが、地元御殿場市消防本部の指導の元で、救命訓練を、絆棟を使用して行った。絆棟の運用の方法を検証していきます。

④法人広報の充実と人材確保

法人広報として、年2回の広報ふじの郷を発行、ホームページの内容の検証を、広報委員会メンバー全員で検証、自己研鑽と同時にタイムリーな発信を行っています。

⑤収益力の再構築

ふじあざみの隣地の購入手続きを完了しました。収益力の向上の為に、さつき学園では、数年ぶりに新規のショートステイを受け入れた。その為には、先ず職員の資質の向上と確保が不可欠です。増収計画を見直し、人材の確保と教育にもっと注力致します。

⑥外部への情報発信

こうした中、昨年12月に静岡県愛護ギャラリー展で、ふじあざみが静岡県知的障害児者サポート協会理事長賞。さつき学園は愛護ギャラリー展実行委員会賞を受賞しました。自閉症という、とかく奇異な目で見られがちな利用者様を外部の人たちに理解して頂く為にも、外部に向けた理解活動は、ふじの郷の使命として今後も実施して参ります。

● さつき学園

① クラスター経験から学んだ、感染症対策と生活の質の向上を両立させる。

令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が2類から5類の扱いとなり、さつき学園感染症対策委員会では、BCPの見直しを行いました。昨年度新型コロナウイルスに罹患した利用者は8月に4名、12月に1名、3月に3名でした。初期対応として罹患した利用者の隔離、その後72時間の活動の制限などを大胆にしっかり行う事で、感染拡大を大きく抑えることが出来ました。職員が利用者の異変に素早く気付くという支援の基本が出来ていたことの成果はとても大きかったです。

生活の中では、外出・外泊などの活動や、コロナ禍以前の行事の実施などを再開し、利用者のコロナ禍の不安を取り除くことが出来ました。

② 各棟にチーム制を導入し、チームによる個々の利用者へのアプローチ体制を確立しました。合わせて専門性を高める研修を行います。

昨年度よりリーダー制を導入しました。今後、指導的支援員の育成を行っていくことで支援体制の強化を図れるものと感じております。研修については系統的に統一した内容のものを基本とし、共通の知識を持ち支援を提供しています。嘱託医による回診の際には、研修により得た知識が実際の支援で正しく提供できているかアドバイスを受けています。

③ 作業班活動の見直しと充実を図る

花苗、野菜苗、工芸作品などの販売は順調に進んでいます。また、神山自然公園の花壇の管理などを通し、地域との交流の機会にもなっています。高齢化への対応として園内作業ではリハビリ活動などを取り入れて個々のニーズに合った活動の提供を始めています。

④ 地域のニーズに対応し、短期入所を受け入れていきます。

新規で女性のショートステイ利用者1名を受け入れました。アセスメントやスケジュールについて慎重に行うことで2回目以降も本人が希望され定期的な利用に繋がっています。

⑤ 個室化に向けた増改修プロジェクトの具体的な作業を進めていきます。

補助金申請が中止となり、増改修プロジェクトは一時中断しましたが、利用者の生活に関わる修繕や改修は、素早く取り掛かりました。施設全体のエアコンの入れ替えは、故障する前に交換できたことで利用者さんへの負担を軽減し、費用も大きく抑えることが出来ました。高齢化による転倒事故防止への取り組みとして手すりの設置を行いました。

⑥ 人員確保と新人教育の確立

福祉業界全体で人材の確保が課題となっていますが、さつき学園として5名の職員を採用しました。常勤職員の採用時にはプライマリー職員を配置し、チェックリストを用いながら3か月のOJTを行いました。非常勤職員には2か月のOJTを行っています。

●グループホームけやき坂

①週末の生活の充実として外部サービスの検討

外部サービスは利用者の金銭的負担もあり、障害年金の中ではあまり活用ができていない。代わりに週末に非常勤職員1名を配置できたので、買い物やおやつ作り、自室や建物周りの清掃等を取り入れる等、グループホームでの生活が充実してきている。

小口現金による余暇の充実も始まっている。

②短期入所について

短期入所は、今後運営会議でどのように進めていくか相談をしていくが、マンパワーが無く進めることが出来ない。

短期入所を受け入れて行く方向で準備する。職員トイレの増設も検討。

③利用者の生活の振返り

支援が困難な2名についてアセスメントを取り直して支援を振返る。その都度、会議を開き支援の統一を目指し有効な手段を見つけていく。また他機関とも協力して良い支援方法を探っている。家庭状況に応じて変化してきている。

家族・相談事業所・福祉課・けやきで都度モニタリングを行っている。

④職員の安定確保

新規採用も含めて、さつき学園とけやき坂で職員配置や職員の働き方の調整を図る。

⑤その他

各自室の押入れに鍵を付け、個人の衣類はなるべく部屋に移して、短期入所部屋を整理整頓していく。週末利用者が増えてもいいように準備しておく。

●神山さつきの森

①個々に合わせた支援を実施

開所5年目となり契約者は32名。個別サポートが必要な子供は14名。

利用児童生徒の幅(知的レベル、年齢)が広いのである程度のレベルに分けた活動グループを作り、時間帯を分けて、公園や外出、園内の広場、絆棟などで活動を行った。

絆棟やプレイルームでおもちゃや活動を要求する絵カードを用意したことで、奇声や不適切行動が減り、職員にカードを渡して自己表出し、適切な要求ができるようになった子供が増えた。

おやつ買いものや畑作業、スタッフのお手伝い(掃除 洗濯)など、身に付けてほしい活動の手順書を用意し、安心して楽しく練習できる機会を多く取り入れた

②自閉症の強みを活かした支援を実施(PECS等)

アスタ(静岡県東部発達障害者支援センター)でPECS(絵カード交換コミュニケーション)

ンシステム)による言語指導を受けている利用児に対し放デイでも PECS の環境を整え、指導を行った。PECS によって表出言語が増え、自発的に要求ができるようになったり、言語表出に繋がった児童もいた。

③アスタのコンサルテーションと再構造化

アスタのコンサルテーションを受け、特に重度の児童 2 名と環境全体についてご助言をいただいた。スケジュールを見直し、エリアの境界を明確にし、活動の見通しがわかる環境の再構造化を繰り返し行った。その結果 子供達が落ち着いて過ごせる時間が増え、支援の手ごたえを感じている。

行動障害の激しい 1 名について引き続き強度行動障害児支援加算を算定

日中一時支援事業所や他の放デイと情報共有する機会を得て、当事業所での実践を地域に知って頂き、当該生徒の地域への移行支援を行うことができた

④第一第三土曜日は普通学級支援学級の子供たちを対象とした活動日とし、利用者の幅を広げ安定した事業運営を確立する

第一土曜日に行っている、支援学級、通常学級在籍の 6 年生～高校生のグループ活動は 4 年目を迎え、今年度は公共交通機関を使ってのららぽーとの計画実施などを行うことができた。参加する子供たちの親和性も高まり、安心して参加し話せる居場所となってきた。スマホの使用ルールや男女交際、自己理解の課題など、それぞれが抱える課題や問題は複雑で多岐にわたる。ここでも保護者の障害理解、連携が一番の課題となっている。

6、12月に実施した保護者交流会では、就労移行支援事業所のサビ管の方のお話と障害者枠の一般就労をした成人の方のお話を聞く機会を設けた。保護者が日頃自宅で療育参加者からは高い評価を頂いた。今後も継続して保護者の交流機会を設け、保護者の障害理解や適切な関りを知る機会を提供したい

⑤職員研修の実施

「NPO法人ゆう」の荻野ます美先生のティーチャーズトレーニングの自主研修を開催。計 5 回 職員 7 名が参加し、子供達の表現行動についての捉え方、対応の仕方の基本と振り返りの方法を学ぶことができた。日々の実践にすぐに活かすことで 職員の効力感が高まり、職員全体の一体感も増した。

令和 6 年度も事例検討の自主研修（講師 荻野ます美先生）を計画。フォローアップの研修として継続していく。さらに、保護者向けの勉強会として、荻野ます美先生を講師に迎えて「ペアレントトレーニング」（全 5 回）を開催する予定（ZOOM）。

●ふじあざみ

①支援について（継続）

・新棟移設後に導入したユニット体制を始めて 3 年が経過。それまで作業ありきだった日課が、作業もある日課へと変わってきた。更に、作業の合間に個別課題を行うという形から、個にあった課題という視点で個別課題と同列に作業を取り扱う形へと変化し

た。つまり、作業を必ず行うという考えから、作業も個別課題も行うという形に変化し、更に場合によっては作業も行うという形になってきた。このことは、取り組みに利用者を合わせさせるのではなく、アセスメントを基にして利用者 に合せた取り組みを行うという事で、とても大切な職員の考え方の変化で、3年目にしてなんとなくこの考え方が定着してきた。

- ・今年も職員研修の時間を使ってそれぞれが一つの教材を作り、職員同士で使用方法や目的を説明しあった。教材の数は増えてきたが、教材の適否、教材の理解や興味、その他評価が不十分で課題を使いこなすまでにはまだまだ至っていない。

- ・一人ひとりが違うので、その特性を理解すべく評価の見直しに務めている。しかし、評価課題の導入が進まずアセスメントシートも有効活用できず、職員の恣意的評価に終わっている状況。どこに躓いているのか、何が原因で混乱しているのか、評価を中心とした支援に向けて今後も弛まぬ努力を続けていかなければならない。

②ふじあざみの方向性の検討

- ・「構造化と日課の設定」というスローガンはまだまだ道半ばだが、並行して次のステップも意識して取り組むようにと考えている。その際のキーワードは「脳の活性化」で、利用者が漫然と取り組むのではなく、脳を働かせた状態を保つことが大切。散歩も常同行動が出ている時は道を替え、課題は慣れたり飽きたりしないように、同じものは何度も行わず、ローテーションを組む等提示の方法を考え、少しでも脳を働かせ活性化できるように工夫している。利用者が脳を働かせているかどうか？考えているかどうか？を職員が頭を働かせて見定めること、そこから始めようと考えている。利用者が考えながら取り組めるように職員が考え“工夫”することから次のステップが始まると考えている。「脳の活性化」に繋がるキーワードは職員の“工夫”です。

③ユニット編成の見直しについて

- ・利用者の作業能力の関係から、一つで行っている自動車部品の受託作業を今年度一杯で終了し、次年度からは自主製品を中心とした作業内容に変更。作業終了にあたってはユニットのメンバー構成の変更も考えたが、作業の方を変えようとの結果になった。

- ・令和6年度の一つの作業は(1)タイルの自主製品(2)解体作業(3)段ボールの組み立て(4)静岡ゴムより(5)矢崎エナジーより、の五つの作業を予定している。

- ・現在3ユニット制を敷いているが、音に過敏な利用者への配慮を検討中。場合によっては四つ目のユニットを組むかもしれない、その際の一番の問題は作業室の確保。

④手厚い人員配置の確立

- ・年度初めは1.7対1の職員配置ができていたが、病気、怪我で二人の職員が長期休暇、退職職員も出て職員が足りない状態となった。ハローワークと福祉人材センターの求人以外に就職相談会等にも参加したが必要な人員確保ができず、それぞれのユニットが少ない職員で支援にあたっている。新年度は定員増も予定しており、職員の採用に向け鋭意努力しています。

⑤事例検討を含む職員研修の充実について

- ・職員減により外部研修への参加は見合わせるが多かった。支援の質を高めるため研修は必要なので、職員確保を図って研修に出られる環境作りに努めたい。

- ・全てのユニットから1ケース以上の事例検討を予定していたが、1例に終わってしまった。原因としては外部研修と同様、職員が少なく、日々の支援に追われてしまい事例を纏める余力がなかったため。

⑥個別外出、あざみフェスティバルの実施

- ・コロナが5類に移行した後も感染者が絶えることはなく、施設内の感染拡大に注意し続けなければならない状況が続いている。そのため、個別外出は限定的な実施で、外食

や買い物も3ケースが実施した程度。

・今年度のあざみフェスティバルは5月の第二土曜日に、利用者と保護者を対象にして実施。今後も基本的には5月の実施を想定している。